令和3年度
人権週間
にともなう

人権作文コンテスト 入賞作品

今年度は、まだまだ厳しいコロナ禍が続く状況ですが、多くの小・中学生の皆さんからご応募いただきました。その中から入賞されました3作品をご紹介します。

最優秀賞

『心配せんと長生きしてや！』

東谷中学校3年　田畑（たばた）　沫葵（しぶき）さん

「しぶき、よう来たなぁ。」

そうやって笑顔で、玄関まで出迎えに来てくれたのはいつまでだったか。背すじをピンと伸ばし、車の運転までこなす、本当に元気な曾祖母の姿が僕の頭の中には鮮明にあるのに、実際に会う曾祖母は、全く違う人になってしまったようで、最近の曾祖母の姿に正直戸惑っていました。

曾祖母は八十七歳で、三年前に椅子から転がり落ちて軽い怪我をしてしまいました。その怪我は大したことなかったのに、その頃から認知症の症状が出始めて、症状は少しずつ進み、今では同居している祖父母に介護してもらいながら生活しています。

トイレにも一人で行けず、度々漏らしてしまうので紙おむつだし、お風呂にももちろん一人で入れないので、祖母が介助しています。

一番ショックだったのは、トイレに間に合わず、ベッドに大便を漏らしてしまったと聞いた時です。曾祖母はどんな気持ちなんだろう、恥ずかしい気持ちだろうか、それとも、悔しいのか、辛いのだろうか。それに、片付ける祖母の気持ちはどうだろう、自分の子どものシーツを洗うのとは違うだろうし、祖母は何も抵抗はなかったのだろうか。僕はそんな事ばかり考えていました。

僕の考えが間違っていたと気付いたのは、介護士をしている叔父と話をした時です。叔父は、

「おばあちゃんはかわいそうなんかじゃないで。うんこもおしっこもちゃんと出るってことは元気な証拠やし。みんなの力を借りて楽しく生きてるんやで。」

と話してくれました。僕は自分の考えが根本から間違っていることに気付きました。一人でトイレやお風呂に行けない事がダメなことで恥ずかしいことである、と知らず知らずに思っていたのです。恥ずかしかったかな？などと心配しているような、優しく寄り添っているような気持ちは、それは曾祖母と祖母からすると上から目線の、とても傷つく気持ちだったに違いありません。

高齢者への差別と聞いてイメージするのは、虐待や高齢者への偏見です。僕はそんなことは絶対にしないという自信がありました。でも、今回のことで、僕も高齢者に対する偏見を持ってしまっていたことに気付いたのです。

一人で何もできず恥ずかしいだろう、辛いだろう、それは僕たちの勝手な決めつけであり偏見です。

今、僕の頭の中は、今度曾祖母に会ったら何の話をしようかな。テレビも一緒に見たいな。ご飯も一緒に食べよう。という前向きなことばかりです。今の曾祖母を昔と比べて、戸惑っていた僕とは違います。少しだけでも変われた僕が、少しでも多く曾祖母と楽しい時間を過ごせたらいいなぁ。と思います。だから、おばあちゃん、何も心配せんと、長生きしてや！

今の大ちゃんは、元気いっぱいでいつも暴れていて、イタズラに私は時々おこっています。四才になる前に歩けるようになりました。まだ話すことはできないけれど、表情はとても豊かです。私の言っていることがわからないから、宿題をしていてもじゃまをしてきます。そういうときは、おこります。体はまだ小さくて、十二キロぐらいしかありません。気持ちが言葉で伝えられず、大ちゃんがどうして泣いているのかわからないときがあります。こういうとき早く話せるようにならないかなと思います。赤ちゃんみたいな大ちゃんですが、私にとっては障がいのある弟というよりも、手のかかる弟というだけです。

先日、神奈川県「津久井やまゆり園」で起きた事件のしょう細を知りました。私はそれを知ったとき、障がい者のいる家族の気持ちを考えました。犯人は「意思そ通のできない重度の障がい者は不幸かつ不要な存在であるため、重度障がい者を安楽死させれば世界平和につながる」という思想を持っていたそうです。そんな考え方の人に、弟を殺されると思ったら、すごくこわくなりました。こんな事件は絶対に起きてほしくないです。

何より、この犯人の考え方はまちがっていると思います。犯人だって、病気や事故で障がい者になることがあるからです。大ちゃんみたいに生まれつき障がいがある人だって、好きで障がい者になった訳ではありません。障がい者のことをかわいそうと言っている人はいるけれど、全然そんなことないと思います。大ちゃんは毎日楽しそうにしているし、そんな姿を見ていると私もうれしくなります。けんかもするし、あまえてきてかわいいときもあるし、障がいがあってもなくてもいっしょだと思います。

人にはそれぞれ思うことがあって、この犯人のような考えをいいことだと思う人が、世の中にはほかにもいることも知りました。でも、大ちゃんと私たち家族の楽しく過ごしている毎日を知ったら、きっと考え方も変わるはずだと思います。

ダウン症の人たちのバディウォークというイベントに行ったことがありますが、他の家族もみんな楽しそうでした。だから私は、こういった考えの人の気持ちを変えたいです。私に何ができるかわからないけれど、差別的な意見で困っていたり悲しんでいる人を見たら声をかけていきたいです。大ちゃんも大きくなって、悲しい思いをすることがあるかもしれません。その時は、私たち家族で楽しく過ごして笑顔でいっぱいにしてあげたいです。

優秀賞

『私の思うこと』

多田小学校6年生　柴田（しばた）　桃花（ももか）さん

私には、もうすぐ五才になる弟がいます。名前は大ちゃんです。生まれる前からじん臓の病気があり、大学病院で生まれ、生まれてからも二か月以上入院していました。大ちゃんには、病気以外にダウン症候群という障がいもあります。大ちゃんがまだ入院しているときに、せん色体の検査の結果をお父さんとお母さんといっしょに病院で聞きました。ダウン症は、せん色体の二十一番目が本当は二本のところ、生まれつき三本あるらしく、二十一トリソミーともいうそうです。そのときお医者さんが見せてくれたせん色体の結果の写真を見て、私は小さかったので、「なんだか虫みたい」と言ってしまいました。みんなで大笑いしたと、お母さんがよく言っています。そのときガラスごしに見た大ちゃんは、鼻からミルクを入れるチューブがありましたが、とってもかわいくて、ふつうの赤ちゃんに見えました。

優秀賞

『わたしのおとうと』

けやき坂小学校2年　千田（ちだ）　琴音（ことね）さん

わたしには三つ下のおとうとがいます。おとうとは、もう四さいなのにしゃべれません。しゃべれないので、わたしとケンカすると、

「あー！」

とか、

「イヤー。」

と大きなこえを出します。そのとき、まわりの人がじーっと見てくるので、なんでかなぁと思います。わたしは、ずっとおとうとといっしょなのでしゃべれないのを知っているけど、知らない人は、へんな子だと思っているのかなと思います。

きんじょのお友だち二人とあそんだとき、男の子がおとうとにむかって、

「バーカ。」

と言ったことがあります。すぐ、その男の子のおねえさんが、

「そんなこと言ったらあかん！」

と、ちゅういしてくれました。

わたしは、うれしい気もちになりました。

おとうとがしゃべれるようになったら、しりとりができるのになと思います。早くしゃべれるのをいのっています。